

ぼくの姉

埼玉県
川越市立上戸小学校三年

中村 涼雅

ぼくには二つ上のお姉さんがいる。名前はもも。ももはぼくと同じで、背が小さい。それなのにぼくのことを

「ちび。」

と言う。それでけんかになる。かならず二回はけんかや言い合いをする。ぼくはももが、いなければいいと思っていた。

この間も何が何回も、うそをついておこられた。何時間もおこられて、さいごには、

「でていきなさい。」

とどなられた。その時ぼくは、こわくなって耳をぎゅつとぶさいでいた。かがが、

「ももにさようならを言いなさい。」

と言った時なぜか体があつくなくて、あせびつしよりになった。そのあと、なみだが出てきたので、目をパチパチさせた。大きくしたりしてなみだがたれないようにした。なぜならなっている顔を見られなくなかったからだ。だけど、あとからあとからでてきてしまつてとうとうポロンとほつ

べたに、たれてきた。そのあとはベッドに顔をつけていっばいないた。いつもはいなくていいと思つたりするけど、なぜかなみだがあふれてきた。

やっぱりぼくは家にももがいた方がいいと思つた。泣いている時に、おかしを分けてくれたこと、泳ぎを覚えてくれたこと、ももの友だちの家に「しよにつれてつてくれて遊んでくれたこと、勉強を覚えてくれたことなどいろいろなこと」を思い出した。ぼくが入学した時もももが、学校にいたからとても安心だった。

ぼくは、ももに「ありがとう。」と言えていたかな。今まで気づかなかつたももへの感しゃの気持ちになみだといっしよに次から次へとあふれて来た。

このことはももにとっておしおきだったけど、ぼくにとてもももへの感しゃの気もちを考えさせられた出来事だった。あまりももに言いたくないけど、今日はとく別だよ。

「もも、いつもありがとう。これからもよろしくね。」